

アンドレ・ブルトン研究

——『ナジャ』における女性の役割——

新 里 直 樹

1. 序

「我々は芸術を、その最も単純な言い回しである愛に還元するであろう⁽¹⁾」とアンドレ・ブルトン (André Breton : 1896-1966) は、『溶ける魚』*Poisson soluble* (1924) の中で記述しているが、ブルトンの主要な作品のいくつかは、実在の女性に触発された結果として誕生したことは伝記的な事実の範疇に含まれる事柄である。『ナジャ』*Nadja* (1928) 及び『通底器』*Les vases communicants* (1932) は、レオナ・カミーユ・ギスレーヌ D (Léona-Camille-Ghislaine D) とシュザンヌ・ミュザール (Suzanne Muzard) の痕跡を明確にとどめており、また『狂気的愛』*L'amour fou* (1937) はジャクリーヌ・ランバ (Jacqueline Lamba) という名の女性の存在なくしては、現在ある形で成立することは不可能であった。

それではブルトンは女性をどのような役割を担う存在として作品の中で表現しているのだろうか。本論文ではブルトンの作品、特に『ナジャ』において表現されている女性の役割の一例を、ブルトンの「私」と連動させて簡潔に考察していくことを目標としたい。

2. ブルトンにおける「私」の問題

ブルトンが「私」という表現を使用して自己について言及している箇所を考察の対象とした場合、ブルトンの使用する「私」が極めて独特な概念によって形作られているものであることが確認できる。『シュルレアリスム宣言』*Manifeste du surréalisme* (1924) のなかでのブルトン自身の言葉を借用するならばブルトンの言及する「私」とは、「理性によって実施されるあらゆる統制の存在しない⁽²⁾」ところで形作られている「私」である。

ブルトンはエクリチュール・オートマティックの最初の実験の結果として、

『磁場』 *Les champs magnétiques* (1919) をフィリップ・スーポーとの共同執筆という形で完成させているが、『磁場』の内部においてはブルトンとスーポーに帰属する文章を判別することが不可能となっており、結果としてこのテキストの著者とははたして誰なのか、という書く「私」の問題を浮上させる装置となっている。また『地の光』 *Clair de terre* (1923) に収録されている《PSTT》は電話帳の中のブルトンと同姓の姓名が記載されている部分から構成されている作品であり、ブルトンにおける「私」への関心が極めてはやい時期から主要な主題の一つであったことが確認できる。そしてブルトンの指揮したシュルレアリスム運動が多数の芸術家たちの個性の上に立脚して成立している点、ブルトンの作品においては異なる国々、異なる時代の芸術家たちが過剰なまでに引用され、それぞれの芸術家たちの所有する「私」が常にブルトンの「私」と通底し、共鳴し合っている点を考慮に入れるならば、はたしてブルトンの使用する「私」とはいかなる性質を帯びたものなのか、という問題が必然的に設定されえる。

しかし我々はいかなる沔過作業にも没頭することがなく、自己の作品の中で自分を数々の反響を飲み込んでしまう無音の収集装置に、それらの反響が描き出す模様を心奪われることのない謙虚な記録機械に仕立て上げてきたのであり、おそらくなお一層高貴な目的に奉仕することになるだろう。³³⁾

そして今度は芸術家がこれまであれほどまでに執着していた個性というもの捨て始めるのだ。彼は突然、宝の鍵を手に入れる。しかしこの宝は彼のものではなく、たとえ巧みにやってのけたとしてもそれを自分のものだと主張することは不可能である。つまりこの宝は集合的な宝以外のなにものでもないのである。

同じくこのような条件の下では、芸術において問題となるのはおそらく、もはや個人的な神話を創造することではなく、シュルレアリスムとともに集合的な神話を創造することなのだ。⁴⁴⁾

上記の引用はそれぞれ『シュルレアリスム宣言』、『今日の芸術の政治的位置』 *Position politique de l'art d'aujourd'hui* (1935) からのものであるが、ブルトンの関心が「個人的な」「私」を否定し、「集合的な神話を創造する」ことのうちに存在していることが確認できる。またブルトンは自己を「個性」を所有する

ことのない「収集装置」や「記録機械」として表現している。では、「個性」を否定し「集会的な神話の創造」を掲げるブルトンの「私」とはどのような特徴を帯びたものなのか。「個性」を否定したあとに残る「私」とは、厳密な意味で「私」として認識することが可能なのだろうか。

あまりにも独特の概念に立脚して存在するブルトンの「私」の問題は、これまでマルグリット・ボネ (Marguerite Bonnet), ピエール・アルブーイ (Pierre Albouy), ポール・ブルビエ (Paule Plouvier) に代表される数多くの先行研究者たちにより取り上げられ、ブルトンの活動を解釈する主要な要素として研究の対象となってきた。自己の「個性」を否定することで発動したブルトンの「私」は自己同一性を喪失し、「開け放たれた扉」のように数々の「個性」を吸収する運動を開始する。そして自己同一性が崩壊した後のブルトンは、人生を「暗号文のように解読されることをのぞんでいる」ものとして言及し、無数の「暗号」のうちそれを解読する「鍵」として内包されているにちがいない「集会的な宝」の可能性を探求の指標とする。

次にこの「私」から派生する問題が『ナジャ』においてどう反映しているかを考察することとする。

3. 『ナジャ』における「私」の分割

「私とは誰であるか？」Qui suis-je?⁵⁾ という問題設定とともに開始される物語である『ナジャ』は、ブルトンの「私」から派生する問題を扱った重要な作品である。そしてこの同じ文章がフランス語では単語の活用形の関係で、「私は誰を追っているのか？」と解釈することも可能な両義性をはらんでいるのだが、この文章と次に続く「すべては結局私が誰に『付き纏っている (hanter)』かを知りさえすればいい」という諺のうちには、『ナジャ』で展開されている物語の内容とその特徴が極めて象徴的な形で表現されている。『ナジャ』はそのストーリーの内容として、ブルトンが極めて特徴的な化粧を施したナジャとパリの街で出会い、ナジャに「付き纏う」行為を通して、「暗号」として認識されるさまざまな「信号」に遭遇しながら「半狂乱の探求」を行い、結果として自分だけに託されている「伝信」、そしてその「使命」を解明することで「私」を発見しようと試みる物語だと読み解くことが可能だからである。

自分の中に認めている嗜好、自分の中に感じる類縁、自分がそれに引き付けられる魅力、また自分に起こる自分にしか起こらない出来事、そうしたものを越えたところで、さらにまた自分でしていると意識している多くの動作や自分が感じている多くの感動を越えたところで、私は他人と比較して自分の相異性が何に起因するのかといわないまでも、どこにあるのかを知ろうと努めているのだ。私がこの相異性をはっきり自覚しているかぎりにおいて、他のすべての人々の間でもこの私が何をしにこの世にやってきたのか、また私がどんな唯一の伝言を託された使者としてその使命の責任を自らにのみ負いうのかということが私自身に明かされるのではないだろうか。⁶⁾

『ナジャ』においてブルトンのもとには多様な「伝言」, 「暗号」, かずかずの「信号」が届くが、それらの「信号」のすべては執拗なまでにブルトンに「付き纏い」, ブルトンに自分の「嗜好」, 「類縁」を意識させ、結果として個人的な「嗜好」, 「類縁」, 「魅力」, 「出来事」, 「動作」, 「感動」といった諸々の事象を越えたところで出現するはずである自分だけに託された「伝言」と「使命」, 「自分は何をしにこの世にやってきたのか」という「私」から派生する問題がブルトンの内部で発動する。かくしてブルトンの「私」は始動しはじめ、『ナジャ』においてブルトンは「私」の探求に出発するのだが、ブルトンは外部に存在する事象との衝突を通じて自分を認識しようと試みる。「私」は「相異性」を意識することを通過して明示されるのである。

そしてブルトンは「私」を解明するために雑多な「信号」としてのオブジェに付き纏いはじめるのだが、その結果として『ナジャ』はあまりにも数多くのオブジェが列挙される場となっている。例えばそのオブジェのいくつかを任意に『ナジャ』の中から抽出してみる。「パリのモーベール広場のエチエンヌ・ドレの銅像」, 「薪炭商」の文字が書かれた「看板」, 「ブロンズの手袋」, 「現代劇場」, 「プールヴィールのあるホテルの看板」, 「『ハイラスとフィロナウスとの対話』の版画」, 「ドルボン書店の向こう側の広告灯」, 「スフィンクス・ホテルという文字を浮き出しているネオンサインの看板」etc.....。これらのオブジェの列挙の中に「一匹の昆虫」の夢の挿話や映画『蛸の抱擁』, 芝居『気の狂った女たち』のエピソード、ナジャが何かの暗号のように呟く言葉の数々、ユゴー、ユイスマンス、キリコ、デスノス、エリュアールなどの人物に関するエピソードを加えるとそれはか

なりの数になる。それらの一つ一つをブルトンは何らかの「信号」として扱い、一つ一つに付き纏っていく。しかしそれらのオブジェたちは隠し持つ意味を仄めかすだけで本質が明示されることはなく、どのような「信号」なのかを正確に指摘することが不可能な仕組みになっている。「信号」への緊張した注意が存在するだけで、『ナジャ』におけるブルトンは「解読者」であるよりも「うろたえた目撃者」であると表現したほうが妥当である。「信号」は解釈されることよりもそれに従うことを要求しているのだ。『ナジャ』においてブルトンは「私は誰であるのか?」と問題を設定するのだが、私が誰であるのかが解明されていく過程と雑多な「信号」に「付き纏う」行為自体にのみ重要性を置き『ナジャ』と題されて作品は構築されている。

そして「私」を探求し、「付き纏う」行為を記述していく過程でブルトンの「私」は奇妙に分割したものとして表現されている。

朝の新聞は、私にいくつかの自分の消息を知らせるのに十分である。

X 発, 12月26日。ル・サーブル島にある無線電信局に勤務中の担当技師が、日曜日の夜のしかじかの時刻に…から発信されたと思われる通信の一部をとらえた。その通信はとくに「どこかどうも具合のよくないところがある」と述べていたが、そのときの飛行機の位置を明示することはしなかった。そして極めて悪い気象条件と次々に起こる電波障害のために無線技師はそれ以上どんな言葉も理解することができず、新たに連絡を取ることも不可能になった。¹⁷

引用した彷徨える飛行機のエピソードは『ナジャ』のほとんど結末といってよいエピソードであるが、「私にいくつかの自分についての消息を知らせる。(me donner de mes nouvelles)」とブルトンが記述している表現の箇所を考察の対象とした場合、「私」の分割が明確な形で行われていることが理解できる。この表現はブルトンの「私」が分割されて、ある種の他者性を帯びているかのような印象を与えている。そしてブルトンが「私」に関する消息を発見するのは朝の新聞の中であり、この「私」の分割を通じてブルトンの「私」は「私」を発見し、「私」に再び出会う仕掛けになっている。ブルトンの「私」は外部に設定され、「私」を発見するための「半狂乱の探求」へとブルトンを導いていく。

シュルレアリスム運動の活動が開始した当初からブルトンは偶然に発生する一

致や彷徨、つまりエクリチュール・オートマティックによって言語の結合が発生するにまかせる方法や、オブジェのある種の結合が発生し存在を提示するに至るまで街中を無目的に歩き続けることで自分を探索することを提案してきた。ブルトンの「私」は常に何等かの結合を待望しており、自分に関する意味の啓示を外部から受け取り、外部の出来事との関係性のうちにおいて表現されている。そして「私」の探索の運動においてブルトンの「私」は「私」の外部に設定され、ブルトンは「私」を発見し「私」を豊饒にしていくのだが、その運動は同じ『ナジャ』で語られているエピソードの一つ、自分の後ろに自分を従え、またその後ろに自分自身を従え、無数の自分自身を従えながらニューヨークへ侵入する中国人の登場する映画『蝸の抱擁』を想起させる。

4. 「君」

「私」の死に物狂いの探求の物語であるはずの『ナジャ』は、しかしながら突然その探求を中断してしまう結果となる。精神病院に収容されたナジャの狂気を促進させたにちがいないブルトンの自責の弁解と解釈することが可能な精神病院の非難に終始する記述の後で、物語は『ナジャ』の冒頭で設定された問題にいかなる明確な解答を提出することなく、むしろ冒頭の問題に対応するような問題を再び提起することで閉じられていくような印象を与えているのだ。つまり冒頭で設定された「私は誰であるか？」という問題そのものが、いかなる解答も導き出さずに「そこにいるのは誰だ？ ナジャ、君なのかい？ 来世の、しかも来世のすべてがこの人生の中にあるというのは本当なのかい？ 私には君の声が聞こえない。そこには誰がいるんだ？ 私だけなのだろうか？ 私自身なのだろうか？」⁽⁸⁾という同種類の悲壮な問題により投げ返されてしまう結果となっている。『ナジャ』という物語はここで結末を迎えたほうが、あるいはその物語としての体裁を整えていたかもしれない。「ナジャの物語は完結し、小説はここで完了しても妥当だっただろう」とマルグリット・ボネが記述しているように、ナジャという女性を媒介とした「私」の探求はここである種の結末を迎えている。しかし『ナジャ』は「君」と呼ばれる女性の介入によりその所有していた性格を変質させて再開されていくのである。「君」の介入をゆるしたのは、『ナジャ』を作成する過程の中に存在する時間の隔たりである。つまり『ナジャ』の中で記述されていることから確認できる事実は、『ナジャ』の作成が1927年8月の終わりから同年の12月の終

わりまでの間中断されていたこと、「私自身なのだろうか？」という悲壮な叫びで終わる部分と次の部分の間には、テキストに挟まれている空白よりも大きな価値を所有する時間的な間隔が存在しているということを報告している。そしてその文章の執筆された時間の隔たりにより、『ナジャ』はその性格を変貌させてしまう結果となった。

この時間の隔たりの間に重要なことがブルトンの人生に発生したのである。それはブルトンによって熱烈に愛された女性であるシュザンヌ・ミュザールの登場であった。

私はもうこの最後の数行とこの本をめくってみて2ページ前で終わっているように見える数行を隔てている間隔の上にはしか身をかかめる気持ちにはなれない。それは非常に短い間隔で、先を急ぐ読者たちは見落としてしまうだろうが、私にとっては常軌を逸して評価できないほどの価値をもつ間隔なのである。¹⁰⁰

『ナジャ』の作成の過程に存在しているこの時間的な「間隔」の間に、ブルトンはシュザンヌ・ミュザールと出会ったのである。

ブルトンに原稿を依頼していた編集者であるエマニエル・ベルルに同伴していたシュザンヌ・ミュザールと出会ったのは1927年11月のことであり、ブルトンはすぐに彼女の青い目に魅惑される。ブルトンとシュザンヌの間の伝記的な事実の範疇に含まれる事項は、アンリ・ベアール (Henri Béhar) による『アンドレ・ブルトン』(Andr  Breton) の中で詳細に記録されているが、このシュザンヌこそが『ナジャ』の中で「君」と表現され、ブルトンの後続の作品である『通底器』では「X」と呼ばれている女性なのである。

そして12月の終わり以降に執筆された最後の部分においては、愛された女性の出現により、「私とは誰であるか？」という問題はあまりにも人間的な存在に場を譲るために消滅し、ブルトンがナジャとともに行ってきた「半狂乱の探求」はその運動を停止してしまう。愛された女性である「君」の介入により『ナジャ』において解釈されないままに放置されていたすべての「信号」は、「君」のうちに吸収され、「さまざまな謎の連続」も「君」の前では永久に終わってしまう。そこでは情熱が唯一のものとしての価値を付与されており、「私」から派生する

問題は「君」の目の前で静止してしまう結果となっている。

そして私にとってさまざまな謎の連続が、君の目の前で永久に終わりをむかえたことも、私の知りえたすべてなのだ。

君は私にとって謎でさえない。

君は私を謎から永久にそむけてしまう。

君だけが存在することを知っているように君が存在している以上、おそらくこの書物の存在はそれほど必要ではなかっただろう。君を知る前に与えようとしていた結論、君の私の人生への侵入も虚しいものにはしなかったと思えた結論を想起して、もっと別な解決も可能であると私は信じた。この結論は君を通してしかその本当の意味とすべてのその力とを持たないものなのだ。¹¹

愛のもたらす全体性においてブルトンの「私」は自己同一性を発見し、分割されていた「私」を獲得していると考えられることは可能であるが、その解釈は『ナジャ』が愛への供物として捧げられている作品だという事実を浮上させる。「さまざまな謎の連続」が終わりを迎える理由は、「私に君がシメールであると思い込ませ、そして思い込ませている君の中のすべてにもかかわらず、君は一人の女性にほかならない¹²」という記述の中に存在している。ロマン主義に由来する女性と自然の間にある神秘的な関係に結びついた根本的な全体性が「君」を通して発生しているのだ。

グザヴィエル・ゴーチエ (Xavière Gauthier) は、『シュルレアリスムと性表現』 *surréalisme et sexualité* の中で、『餐食』の中で展開されている時のはじめに存在した男性と女性をかねそなえた完璧な人間であるアンドロギュノスの神話を引用しながら、神の怒りにより半分に分割された結果として性が分裂し、自分の半身を発見するまで彷徨うことを運命付けられることになった人間の宿命に着目し、「プラトンがアリストパネスの口を通して提起した原初のアンドロギュノスの神話がブルトンに付き纏っていたのである¹³」として論を展開している。ブルトンにとり見出し愛された女性は、失われた全体性を回復するための糸口としての役割を与えられている、と考えることが可能であると言及しているのだ。結果としてブルトンの作品において女性には、男性が出口もなく苦悩しているときにすべてを美の方向に変貌させる光のごとく出現し、未来を見抜き、「謎」を停止させる力を所有する見者としての役割が付与されている。

また『自由な結合』*L'Union libre* (1931) と題された詩の中でブルトンは、愛された女性の体の各器官を植物、鉱物、動物たちが所有する特徴に還元してたとえ、女性の肉体を細部にいたるまで暗喩法を使用して次々と連続して喚起しながら綿密な描写を行っている。「私の女性は」という呪文にも似た言葉の連呼によって繰り返される愛された女性は、ブルトンによる描写の過程で「藻類」に「砂岩」に「白鳥」に「グラディオラス」に変身をとげ、自然と一体となったものとして表現され、自然そのものに変貌していくのである。

私の女性は 砂岩の尻 石綿の尻を持っている
 私の女性は 白鳥の背中の尻を持っている
 私の女性は 春の尻を持っている
 そしてグラディオラスの性器を持っている
 私の女性は 金鉱床の性器 かものはしの性器
 藻類の性器 古いキャンディーの性器を持っている
 私の女性は 鏡の性器を持っている
 私の女性は 涙をいっぱいたたえた眼を持っている¹⁶⁾

『自由な結合』の中のさまざまな描写を通じて、女性が人間であると同時に植物として、動物として、鉱物として表現されていることが理解できる。女性はブルトンによって自然と同一の存在としての描写を与えられ、自然のあらゆる特徴は愛された女性の肉体のうちに集約され、融合している。ブルトンにとっての女性とは自然そのものだと言断することも、ここにおいて可能だろう。ブルトンのうちには、女性をさまざまな自然が集約されたものとして発見する傾向が確認できる。

女性は子を孕み、命を生み出す。男性にとってはそれだけでも神秘的だろう。そしてこの命を生み出すという行為は、自然が大地の生命力によって草木を生み出すことに比較することが可能である。女性は命を孕み生み出すことで自然と通じあい、自然に属している。そして自然とは、そこから隔てられてしまった原初の失われた全体性そのものである。かくしてブルトンの作品において女性を通じて表現されているのは自然であり、ブルトンにとって女性を愛することは自然を愛することと同等の価値を帯びる。その結果として女性に内在されている自然がブルトンに愛を送り返すことになる。そして女性が自然と同義であるからこ

そ、愛された女性が自然の所有する全体性にブルトンを導く結果となる。ブルトンが愛のうちに認めているものとは、自然が包括しうるあらゆる全体的な認識と知覚に至る糸口だと考えることが可能となるのだ。

5. ナジャ

『ナジャ』の女主人公は、「君」と呼ばれているシュザンヌ・ミューザルではなく、その標題にもなっているナジャと自称した女性である。小説のなかでナジャ本人が与えている説明によると、この名前は「ロシア語の希望という言葉」から抽出した「はじまりの部分」⁹⁵である。ナジャの実名はブルトンにより明記されることはなかったが、プレイヤー版ブルトン全集の注釈を使ってマルグリット・ボネはナジャの実名に関して言及し、レオナ・カミーユ・ギスレーヌ D という名前をあげている。⁹⁶レオナ・カミーユ・ギスレーヌ D は1902年5月23日に出生した女性で、『ナジャ』の中で彼女がブルトンに語っている両親の話は事実と一致しているという確認がとられている。

そしてナジャが精神病院に收容されてしまうと、「私」を追い求めるブルトンの「半狂乱の探求」は終わりをつげ、『ナジャ』はその性質を変貌させていく。精神病院に連れ去られたナジャに示したブルトンの態度は極めて冷淡であった。ブルトンは愛によってしかナジャが迷い込んだ悲惨な現状を解決することは不可能であることを確認しながらも、ナジャを愛していないことを認め、ナジャを見捨ててしまうのだ。精神病院の扉の前で、ナジャの狂気を促進する形で遂行されたブルトンの「半狂乱の探求」は中断されてしまう結果を迎える。

私が理解している意味においての愛だけが、神秘的で、ありそうもない、唯一の、当惑を引き起こす、疑いの余地のない愛だけが、あらゆる試練がなければ存在しないような愛だけが、ここで奇跡の成就を可能にしたにちがいない。⁹⁷

しかしブルトンとナジャの間に「奇跡」は発生しない。ブルトンとナジャの接触が終了する直前の部分でブルトンは、生活上の細々な出来事を除いて「今までに一度もお互いを理解しあったことなどなかった」⁹⁸ことを告白し、度を越すようになったナジャの失礼な態度に絶望し、「彼女が自然なものになることなど問題にもならなかった」と言及している。

ブルトンにとりナジャは表現する対象として存在していたにすぎない。そしてナジャは、ブルトンの欲望を忠実に反映する存在でもある。『ナジャ』においてなぜナジャが神話上の妖精であるメリュジーヌに自己を投影したり、透視力をブルトンの目の前で発揮しなくてはならなかったのかの理由を検討した場合、ブルトンが希望するとおりに、ブルトンの欲望が命じるとおりに演技を行わざるおえないナジャという女性に与えられている役割が浮上してくる。

「もしあなたが望むならあなたのために私は、何でもないものにだって、一つの足跡にだってなれるでしょう」

「あなたは私の主人。私はあなたの唇の端で息を吸ったり、吐いたりしている一つの原子にすぎない」¹⁹

ナジャは小説のなかでさまざまな能力を所有した女性として表現されているように映る。しかしその能力を与えているのはブルトンであり、ブルトンの外におかれてしまえばナジャの特性は消滅してしまう。ナジャはブルトンが望めば、「何でもないもの」にも「一つの足跡」にも変貌することが可能なのであり、ナジャの存在はブルトンの「唇の端で息を吸ったり、吐いたりしている一つの原子」にすぎないものとしてナジャ自身により認められている。ナジャの「主人」はブルトンであり、ブルトンは「主人」の資格のもとに対象としてナジャを表現している。

愛された女性である「君」と、愛されることのなかった女性である「ナジャ」との役割の差異が、『ナジャ』という小説の内部では明瞭な形で刻印されている。

6. 結論

以上本論文では、『ナジャ』の中でナジャと自称した女性と「君」と呼ばれている女性の所有する役割を考察することを目的としてきた。二人の担う役割はあまりにも対称的である。

そして、それは「私は誰であるのか」という「謎」と言い換えることも可能な問題提起が、誰との出会いにより発動し、誰との出会いにより消滅したかを想起するとき、二人の女性を通して表現されている『ナジャ』の主題の明暗を明確にする性質のものである。

註

本文中のブルトンの作品の引用は、André Breton, OEuvres complètes, Edition établie par Marguerite Bonnet, 《Bibliothèque de la pléiade》, Gallimard, に拠り, tome I は1988年, tome II は1922年にそれぞれ出版されたものである。

以下, O.C., tome I, tome II と略記する。

- (1) O.C., tome I, p.359.
- (2) *ibid.*, p.328.
- (3) *ibid.*, p.330.
- (4) O.C., tome II, p.439.
- (5) O.C., tome I, p.647.
- (6) *ibid.*, p.648.
- (7) *ibid.*, p.753.
- (8) *ibid.*, p.743.
- (9) *ibid.*, p.1500.
- (10) *ibid.*, pp.744-745.
- (11) *ibid.*, p.752.
- (12) *ibid.*, p.751.
- (13) Xavière Gauthier, *Surréalisme et sexualité*, Gallimard, p.72.
- (14) O.C., tome II, p.87.
- (15) O.C., tome I, p.686.
- (16) *ibid.*, p.1509.
- (17) *ibid.*, p.736.
- (18) *ibid.*, p.735.
- (19) *ibid.*, p.719.